

1 1. なづける一口頭伝承 2 -

菊地暁 (folklore.lecture@gmail.com)

① 「なづける」ということ：「生活世界」を成立させるものとしてのコトバ

- ・音声分節の恣意性／意味分節の恣意性
- ・ソシユールの記号論：「 $\overset{\sim}{シ}$ $\overset{\sim}{ニ}$ $\overset{\sim}{フ}$ $\overset{\sim}{イ}$ $\overset{\sim}{ア}$ $\overset{\sim}{シ}$ 」と「 $\overset{\sim}{シ}$ $\overset{\sim}{ニ}$ $\overset{\sim}{フ}$ $\overset{\sim}{イ}$ $\overset{\sim}{エ}$ 」の「恣意性」

② 「新語」by 柳田国男 1936『国語史新語篇』刀江書院（定本 18、文庫 21、全集 9）

- ・新語の発生：新しい事物・観念／既存の語彙の忘却／既存の語彙の補訂
- ・効果の追究：語音、語形、連想の妙味など
- ・さまざまな新語：新物新語、旧物新語、限定保存、複合保存、レトロニム、新物旧語…
- ・新語の定着「総員の是認が新語の条件であったというよりも、むしろその小さな社会の意志が、ある一人の口を借りて表示せられたという方が当たっている」

③ 「地名」by 柳田国男 1936『地名の研究』古今書院（定本 20、文庫 20、全集 8）

- ・「要するに二人以上の人の間に共同に使用せられる符号である」
- ・「利用地名」交通、動植物採取、耕作など人間の移動や生活の必要から名付けられたもの
- ・「占有地名」山野その他を我が所有地とした占有経営に伴うもの
- ・「分割地名」利用・占有にかかる土地区分を細分・分割してよぶもの

④ 「伝説」by 柳田国男 1942『木石語』三元社（定本 5、文庫 7、全集 13）

- ・形式性の欠如
- ・対象物（木、石、水、塚、坂・峠・山、祠堂…）の存在
- ・信すべき内容→（信じる共同性の存在）→「合理化」へのベクトル
- ・伝説の「管理者」としての遊行宗教者・芸能者、
- ・「伝説」と「歴史」：野生と栽培？ 機能的類似、歴史の隙間を埋める伝説

⑤ 「都市伝説 urban legend」

- ・「都市伝説」のエンタテインメント化、ネットロア、フェイクニュース
- ・「伝説」を支える伝統的共同体の衰退／新たな「伝説」を支える新たな共同性の出現

* 文献

池上嘉彦 1984『記号論への招待』岩波新書

松谷みよ子 2003-2004『現代民話考』全 12 巻、ちくま文庫

一柳廣孝編 2005『学校の怪談』はささやく』青弓社

小林康正 2009『名づけの世相史 「個性的な名前」をフィールドワーク』風響社

松本修 2013『どんくさいおかんがキレルみたいな。一方言が標準語になるまで』新潮文庫

伊藤龍平 2016『ネットロア：ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』青弓社

森達也 2019『フェイクニュースがあふれる世界に生きる君たちへ 増補新版 世界を信じるためのメソッド』ミツイパブリッシング

大師講の由来

傳説の上では、空也上人よりもなほ弘く日本國中をあるき廻つて、もつとたくさんの清い泉を、村々の住民のために見つけてやつた御大師様といふ人がありました。大抵の土地ではその御大師様を、高野の弘法大師のことだと思つてゐましたが、歴史の弘法大師は三十三歳の歳に、支那で佛法の修業をして歸つて來てから、三十年の間に高野山を開き、むづかしい多くの非物を残し、また京都の人のために大切ないろいろの公事をしてゐて、さう遠方まで旅行をすることの出来なかつた人でもあります。多分はかういふえらい方だから、亡くなつたと見せてほんとうはいつまでも、幽々を巡つて修業してゐられるのであらうと思つてゐた人も少くはなかつたので、こんな傳説が弘く行はれたのであります。高野の大師堂では、毎年四月二十一日の御衣替へに、大師堂の御像の衣を替へて見ると、いつもその一

それから能登の方でも羽取といふ海岸の村では、昔弘法大師がこのへんを通つて水を求められた時に、情なくも惜しんで上げなかつたため、大師は腹を立て、一村の水を封じておしまひになつたといつて、今でもどこを掘つて見ても水に鏡気があつて使ふことが出来ず、仕方なしに食べ物には川の水を汲んで來るといふ話でありました。

(能登町名跡志。石川縣鹿島郡尾村羽取)

また羽咋郡の末吉といふ村でも、水を惜しんで大師に與へなかつたゆゑに、今に良い水を導くことが出来ぬといつてゐますが、その近くの志加浦上野といふ部落では御取り持ちがよかつたので、大師はその御懸に傍の岩を指さすと、忽ちその岩の中から水が涌いたとあつて、名産の志加晒布また能登縮をこの水で晒して、いつまでもその恩恵を受けてゐるといふことであります。

(滝土研究三編。石川縣羽咋郡志加浦村上野)

・若狭の關原川原といふ所は、比治川の水筋でありながら、常は水がなくて大雨の時にばかり、一ぱいになつて渡ることの出来ない困つた川でありました。これも昔この村の老

女が一人川に出て洗濯をしてゐるをりに、僧空海が行脚して來て飢渴に及び、水でも貰ひたいとこの老女にいはれたところが、この村には飲み水がありませんと、すげなくも断りました。それを非常に立腹して喝へごとをしてから川の水はことごとく地の下を流れて行くことになつて、村ではなんの役にも立たぬ川になつてしまつたのだそうです。

(若狭郡志志。福井縣大飯郡若狭村關原)

近江の湖水の北にある今市といふ村でも、村には共同の井戸が一つあるだけで、それがまた優れて良い水でありました。これも弘法大師が諸國を遍歴して、ちやうどこの村に來て一人の若い娘に出逢ひ、水が飲みたいといはれました。さうすると親切に遠いところへ汲みにいつて、久しい間大師を待たせましたので、大師がそのわけを聞いて氣の毒に思ひ、持つてゐた杖とある岩の間を突かされると、すなはち海水が涌き出たのがこの井戸であるといひます。

(滝土研究三編。滋賀縣伊香郡井田村今市)

伊勢の仁田村では非戸世古の二つ井といつて、一つは濁つて洗濯にしか使はれず、その隣

